

能が地域社会の中で受容され機能してゐることを重視するならば当然の視点であろうし、起源譚や伝承と祭礼との関わりも、日本神話と祭祀が分からちがたく結び合つてゐる相関関係を考慮するならば、納得のゆく視点なのである。

本書所収の各論考と時期を等しくして、著者は民俗芸能研究を根底から問い直した一連の理論研究を陸続と発表した。「これは『民俗芸能』ではない」(小松和彦編『これは『民俗学』ではない』1989.8 福武書店)、「文化としての民俗芸能研究」(『民俗芸能研究』第10号 1989.11)、「民俗芸能研究における現在」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第17集 1990.3)、「民俗芸能の知的可能性」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第三四集 1991.3)、「正しい民俗芸能研究」(第0号 1991.12 民俗芸能研究の会／第一民俗芸能学会)、「芸能の条件——「招かれざる客」再考——」(『新編』1993.2)、「民俗」と「芸能」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第51集 1993.11)などの諸編を通して、半世紀に及ぶ民俗芸能研究の学説史を始まりに遡つて再検証し、用語を問い合わせし、新たな方法論を模索し、今後の学的 possibility を追究している。

本書はこうした理論研究と相俟つての個別実証研究なのである。

各論考がそれぞれ個別に発表されたという

経緯も手伝つてか、記述内容・参考文献・写真などに繰り返しや重出・重複が多く見られ

るのが気になった。そうした瑣末な点は別に

して、著者渾身の力量を發揮した、民俗芸能研究に新たな時代の到来を予感させる一冊である。

(一九九七年二月、ひつじ書房
九二二三三円)

（ほさか・たつお／東横学園女子短期大学）

（ほさか・たつお／東横学園女子短期大学）

（ほさか・たつお／東横学園女子短期大学）

書評 稲田浩一著

『昔話の源流』

松原孝俊

口承文芸である。タイプは、語り手たち

が共有する、文芸形象の核心である。民

族の伝承に裏打ちされた、最大多数の語

り手たちの、人生観照の結果である。」

(第二八卷) 一九八八年、一頁)

「遠祖から今に受け継がれてきた昔話に、インデックスの比較と、国内の日本昔話のタ

イプ研究の対照を試み、昔話の比較研究と通

がゆえに、彼は「国際的・民族的なタイプ・

私は畏敬の念を抱いている。私の学的関

心は、個々の昔話語りを世に送り出した、時的研究」の重要性を強調してもいる。

昔話の文芸性に向けられていく。(中略) ——昔話はいわば総合的に演出される

文集である。なるほど稻田の前著『昔話の時

代』（筑摩書房、一九八五年）でも、例えば第一

一章「ヒマラヤを越えて」の中で昔話「長良

の支柱」を題材として取り扱っているものの、一〇

一九九二年　瓜姫」系譜考

神によるオオナムヂの未来の予祝の4モチー

本格的な研究の開始は、日本昔話のタイプ研

究『日本昔話通観』第二八巻、「昔話タイプ・インデックス」一九八八年、以下『通観』と略す)と国際的タイプ・インデックスの比較

研究『通観』研究編1、「日本昔話とモンゴロイド」一九九三年)の完成を待たなくてはならなかつた。事実、『昔話の時代』のあとがきで、稻田は「私はいま峰に立つて、やうに思う」と記し、「次の第一歩」の準備をする宣言したほどである。

確かに本書に収載された論文の初出年を一

見すると、

一　『稻葉の素兎』試論—その通時的国際性

一九九六年　「瓜姫」系譜考

一九九二年　神によるオオナムヂの未来の予祝の4モチー

一　『猿蟹合戦』の成立

一九九〇年　天翔る馬

一九八九年　フで構成されているという。その上で「魚族

四　神々の人界巡回—『法苑珠林』と日本説話

一九八八年　天翔る馬

一九九〇年　アソシエーションの橋

五　「天人女房」タイプの生成

一九九〇年　天翔る馬

一九九一年　アソシエーションの橋

六　知瓊説話と「鶴女房」

一九九〇年　天翔る馬

一九九一年　アソシエーションの橋

七　「人影花」考

一九九〇年　天翔る馬

一九九一年　アソシエーションの橋

八　鳴づハ雉子モ射ラレマジキヲ—人柱説話

十神たちによる倍加したウサギの苦悶、(4)

これは稻田の他書にない、本書だけの特色である。

二　白はなぜ梁に登れるか

一九九六年　天翔る馬

一九九一年　アソシエーションの橋

三　『猿蟹合戦』の成立

一九九一年　天翔る馬

一九九一年　アソシエーションの橋

四　神々の人界巡回—『法苑珠林』と日本説話

一九八八年　天翔る馬

一九九〇年　アソシエーションの橋

五　「天人女房」タイプの生成

一九九〇年　天翔る馬

一九九一年　アソシエーションの橋

六　知瓊説話と「鶴女房」

一九九〇年　天翔る馬

一九九一年　アソシエーションの橋

七　「人影花」考

一九九〇年　天翔る馬

一九九一年　アソシエーションの橋

八　鳴づハ雉子モ射ラレマジキヲ—人柱説話

十神たちによる倍加したウサギの苦悶、(4)

これは稻田の他書にない、本書だけの特色である。

二

確かに本書に収載された論文の初出年を一

見すると、

一　『稻葉の素兎』試論—その通時的国際性

一九九六年　天翔る馬

一九九一年　アソシエーションの橋

二　白はなぜ梁に登れるか

一九九六年　天翔る馬

一九九一年　アソシエーションの橋

三　『猿蟹合戦』の成立

一九九一年　天翔る馬

一九九一年　アソシエーションの橋

四　神々の人界巡回—『法苑珠林』と日本説話

一九八八年　天翔る馬

一九九〇年　アソシエーションの橋

五　「天人女房」タイプの生成

一九九〇年　天翔る馬

一九九一年　アソシエーションの橋

六　知瓊説話と「鶴女房」

一九九〇年　天翔る馬

一九九一年　アソシエーションの橋

七　「人影花」考

一九九〇年　天翔る馬

一九九一年　アソシエーションの橋

八　鳴づハ雉子モ射ラレマジキヲ—人柱説話

十神たちによる倍加したウサギの苦悶、(4)

これは稻田の他書にない、本書だけの特色である。

思想の古層」であるという。その前提の上で、全国から収録された四三二話の「猿蟹合戦」が仏教学者宮本正尊の「草木成仏論」を連想する。これを検討すると、九州地方だけのながら、東北アジアの民間説話（漢民族・現象として、周知の「柿争い・仇討ち型」（二ミヤオ族・蒙古族・朝鮮族・アイヌ族）との比較を試み、

①粗暴で敵対的な登場者が、誠実で気の

弱い登場者をおびやかす。

②小動物、または非情な、多様なものが弱者に協力する。
③協力者たちは、それぞれのもつている特色を發揮して、敵対者を倒し弱者を救う

の3点に類似を認め、直感的に稻田はキー・ワードとして「非情」を抽出する。そして『パンチヤタントラ』の「雀ときつきと鶴と蛙と象」や『ジャータカ』の三五七「鶉本生物語」などの流れを汲む「猿蟹合戦」が日本に定着したのは、もともと非情な草木・器物の働きを認める「受け皿」が日本民族に存在したからであるといふ。

第三論文が発表されたのは一九九一年であるが、どうやらこの前後から、本格的に稻田の関心の所在が説話の成立時期推定へと移行したようである。彼の推論の順序を検証してみよう。出発点は、『日本昔話通観』資料編に

が優勢する事實を指摘できるといふ。より詳細には「柿争い・尻はさみ型」は、九州を中心には四国を含む西日本に限定された伝承であると推論する。この点に立脚して、稻田は「柿争い・尻はさみ型」の類似伝承をフィリピン・インドネシア・台湾高砂族・ミクロネシア・メラネシア・スリランカに求めることで、日本のそれが「採集狩猟時代に起源をもつ南方伝承圏の動物譚の北限」であり、「繩文時代以前のおもかげ」を留めているみなす。そこで議論を転換して、では「柿争い・仇討ち型」の「猿蟹合戦」の成立時期はいつか、を考察する。手掛かりは、このタイプの分布が沖縄諸島にその伝承の影が皆無であることである。

これに加えて、第一論文でも援用した宮本正尊の「草木成仏論」を下敷きにしてその思想が「中世から近世初頭にかけての語り手たる見えざる覚醒」を呼び覚ました結果、この「仇討ち型」が成立したという。この推論は、考古学者が指摘する「沖縄が」同時代の日本本土とは全く異なる社会発展のコースを歩んだ時期、すなわち一二・一三世紀から一八世紀（江戸の赤本出現期）までと、よく

符合すると説く。

さて稻田の説話研究史をたどる時、一九八七年～一九九〇年ごろは「法苑珠林時代」であると考えて良い。時期を同じくして発表された第四論文・第六論文・第七論文・第一〇論文の四編の要所要所で、この「法苑珠林」を決まり手としているからである。併せて注目すべきは、ほぼこの時期に稻田の「昔話タイプ・インデックス」（『日本昔話通観』第28卷、一九八八年）が完成したことである。この作業の完成によって、彼は『法苑珠林』の読解を進めながら、能率良く日本の説話群を検索しつつ、両者に類似する説話の比較を可能としたにちがいない。第四論文は「昔話タイプ・インデックス」から超越者（神々）の人界巡回タイプ群「大みそかの客・授福型」「もの食う魚」など二二タイプを対象として検討したものである。彼の論法は次の通りである。超越者の人界巡回説話がインド・中国などに地理的分布していることから、日本のそれも「日本民族の古層伝承」であると前提し、これを縦軸とする。そして『法苑珠

林』所載の諸仏典がこのタイプの説話に強い影響を与えたと推論して、仏教受容以前と以後とに区別することを提案する。そして第三論文の手法通りに類似伝承が沖縄に語り伝えられているかどうかで、さらに「中世以降に成熟したタイプ」であるかどうかが判別できるとして、これを縦軸に採用する。その上で、『今昔物語』卷一六の長谷觀音の利益説話に着目して、これと「大みそかの客—授福型」説話との類似が認められるとして、「古代末期に長谷觀音の靈驗説話として結晶した『大みそかの火』を、在來の神々の巡行説話に習合していく過程があつた、と推定したい」と説く。

第六論文（タイプ三二八A「美女奪還一人影花型」）および第七論文（タイプ二二九A「鶴女房—離別型」）は、第四論文のレールの上で執筆されたもので、同様に『法苑珠林』と沖縄の類似伝承の二つが強調されている。この両論文の特色は、柳田國男・関敬吾の二人のタイプロジーの再検討にある。なお本人への確認を怠つており見当はずれかもしれないが、稻田は『法苑珠林』講説会に参加し研鑽を積みながら、その席で「構造的的なもの見方を学んだようである。すでに六〇歳代

であつたはずの彼の學問への飽くなき執念を知る思いである。

ところで一九九二年頃から、稻田は仏教への関心を急速に失つたのではあるまいか。少なくとも仏教からのアプローチを差し控えていた「仏教受容以前と以後」の切り口もその影を見せない。それに取つて変わつたのは、婚姻制度・人生儀礼である。「婚入り婚時代」（第五論文）、「婿入り婚から嫁入り婚」（第八論文）、そして「成女式」（第九論文）などの用語が彼の論調のキーワードとして登場していく。ここでは紙幅の関係から、稻田の問題の所在がもつとも鮮明に打ち出されている第5論文のみの紹介に留めたいが、念のために記述すれば、これら三論文に共通するのは前述した婚姻制度に加えて、「人類史への接近

といった足跡」は見出せると宣言する。対象は「天人女房」タイプ。論理展開は次のようになる。まず隣接するタイプとの比較を通して昔話タイプの核心モチーフが解明できるので、「星女房」に着目すれば、「(天女の羽衣)ごまかし・盗み」モチーフが自然と抽出できるという。それを国内外の類似伝承と比較しつつ、古代に遡る伝承であると推定するのは、いつもの常套手段。時代的に決して新しい成立ではないことを読者と共に確認しつつ、次に夫が妻を追慕してその後を追う「昇天モチーフ」に注目すべきであると説く。というのもそのモチーフの中に含まれる天界の住人たちによるテストモチーフこそが「天人女房」生成時期を推定する根拠となるからだといふ。例によつてアジアの類似伝承を丹念に集めて、テストモチーフが「婚入り婚時代の一時代、焼き畑農耕の盛行期」を反映していると推定して、章を締めくくる。

第一一章は、ユーカラなどと知られるアイヌ叙事文芸を対象として、そのタイプとモチーフの観点から「人類の民間説話史」の中での位置づけを狙つたものである。彼の試算によると、日本昔話の一二一一タイプを基準とすれば、朝鮮民族では17%、漢民族では

23%であるのに対し、アイヌ民族の昔話はわずか12%しか類似しないという。そこで「瓜姫」・「犬婚入り」・「天人女房」などを例話として、彼の「核心モチーフ」論の観点からアジアの類似伝承との比較を試みると、アイヌ叙事文芸は「もっぱらアイヌ民族の内部で自立的な生成の過程をたどってきたことに

なり、そこには人類の最古の叙事文芸の相」が保存されていると説く。

第一二章は、本書の題名と対をなす「物語の源流」を論じたもの。「物語の出で来はじめの親」である『竹取物語』を対象として、「口承説話と作り物語とを通時の観点から貫して、両者にまたがるその起源と作り物語成立までの道程とを併せて記述すること」が執筆意図であるという。まず伊藤清司らの素材説を一刀両断の下に否定した後、これまでの11の各章と同様に、『竹取物語』に含まれる各種の核心モチーフ（求婚難題モチーフ・異類女房・異常誕生モチーフなど）を国内外の類似伝承と比較しつつ、それらの生成の古さを確認してみせる。例えば、「求婚難題モチーフの説話への定着時期は、縄文末時代の、初期焼畑農耕時代の、すなわち妻問婚当時と推定できる」と提示する。そして月界の呪宝

「不死の薬」に着目して、説話世界ならば口承と書承の別を問わず重要な要素であるが、『竹取物語』ではその呪宝が人界から抹殺され、「愛の讃歌」で結ばれていることに、疑いなく物語の誕生が象徴されていると説く。

三

率直に言えば、本書に対する評者の不満は少くない。三大嘶風ならば、「推論の羽を伸ばした探索・分析用語の混乱・先行論文の無視」となるうか。若輩者がこうした単語を乱用しながら、本書の価値を下げたり、瑕疵を貶すことは容易である。あるいはせめて小島瓔禮・西脇隆夫・斧原孝守らの『比較民俗学会報』に掲載された一連の論文を参照した

ならば、より精密な分布図が製作できたはずであるなどと願うことも可能であろう。たとえそうだとしても、それは無いものねだりであると考えるべきである。逆に言えば、四〇数年間に及ぶ研究実績と『通観』全二八巻の完成、それに引き続く「タイプ・インデックス」「昔話の比較記述」の二冊、およそ一六〇

あるが、本書のどこにも、その定義が示されていないので読み手は困惑するものの、最頻出用語の一つである。「他のすべての昔話タイプと区別する固有性」（一三〇頁）がもつとも正解に近い定義であるうか。稻田によると、例えば周知の昔話「天人女房」の核心モチーフは、前記したように「ごまかし・盗みのモチーフ」（一三三頁）であるという。そしてこの「盗む」モチーフに注目した著者は、

次にフィリピン（部族名は未記入）やチベットなどの文化起源神話を一瞥して、それらに組み込まれている「火種盗み」「穀物盗み」「瓜姫」系譜考」が良い事例であるが、まずの両モチーフと同一視すべきであると教える。したがって「天人女房」は「人類文化の基調」に根ざし、「授与の思想を核心とした異類女房タイプ群から新生した異界の女を盗みとり、人界にその生産力と文化を永続的にもたらそうとする」（一四五頁）伝承であると結論づける。

なるほどこの仮説は新鮮で、説得力もある。管見の限りでは、従来の「天人女房」研究は男女の婚姻にのみ目を奪っていたからである。検索項目に「盗みモチーフ」を入力して、それを膨大な神話伝承の中で検索し、文化起源神話に辿り着くその手法は非凡である。しかしながらこうした「核心タイプ（モチーフ）」論は、その使い方を誤ると「諸刃の剣」になる恐れもないだろう。というのも著者が作成した伝承分布図で確認できるよう南はパプアニューギニア、西はパキスタンのカムチャッカ半島のチュクチ族から北はカムチャッカ半島のチュクチ族からである。南北のモチーフのポジとネガを用いて二つのタイプの分布図が作図され、どれがポジ（「姫」と妹」タイプ）であり、どれがネガ（「瓜

座をめぐって葛藤し、姉が妹を殺して「にせの花嫁」になります、「姉と妹」タイプの昔話を見つけだせることがある。やはり「通じ」を自家薬籠中の物としている著者ならではの芸当であろう。そしてその両タイプの昔話のアジアにおける分布図を作成する（二四三頁）。これまでにも多数の類似説話伝承のかなり複数が提出されたが、このように「核心モチーフ」の論は、その使い方を誤ると「諸刃の剣」になる恐れもないだろう。この芸当は、後人に真似の出来ない手法であるとはいえ、積極的に採用すべきものであると言つて良い。だからといって「いずれ

そこで、第2番目の「昔話の分布様態」論を取り上げることとしよう。第9論文の「瓜姫」の類話はほとんど汎人類的に広汎な民族で生成されてきた（二四八頁）と結論づけて、その国内分布が本州・四国・九州に限定されていると説く。これだけならば凡人でも容易に出来る作業であるが、稻田の着想力の凄さは、日本列島の南北端のアイヌ族・沖縄の両地域にも何か伝承されているはずであると見当がつけられることであり、姉妹が嫁の座をめぐって葛藤し、姉が妹を殺して「にせの花嫁」になります、「姉と妹」タイプの昔話を見つけだせることである。やはり「通じ」を自家薬籠中の物としている著者ならではの芸当であろう。そしてその両タイプの昔話のアジアにおける分布図を作成する（二四三頁）。これまでにも多数の類似説話伝承のかなり複数が提出されたが、このように「核心モチーフ」へと進もう。いつから稻田がこうした人類文化史への関心を抱くようになったのか、忠実には成立し、以降成女式の儀礼を享けて『瓜姫』はほとんど汎人類的に広汎な民族で生成されてきた（二四八頁）と結論づけられるだろうか。評者はこの見解に悲観的である。というのも筆者と評者との間には、「人類文化史」の構想に対する見解の相違が見受けられるからである。

では、第三番目の「人類文化史の復原」論へと進もう。いつから稻田がこうした人類文化史への関心を抱くようになったのか、忠実には「追っかけ」でない評者は知らないが、本書で濃厚になつたのであるまい。『稻葉の素鬼』の核心モチーフ「数かぞえ」は石器時代に遡るとか（二八頁）、九州型「猿蟹合戦」は採集狩猟時代に起源をもつ南方伝承図の動物譚の北限（七一页）とかの記述を見るに、稻田の仮説はかなり断定的である。また日本文化の形成に関する稻田の見解も準備されている（三三三頁）。しかしながらこのように、稻田の仮説が実証的であるかどうかの論議は、またそもそも人類文化史復原の試みさえ放棄した人も存在する限り、これ以

上稻田の仮説の当否を議論することは生産的でないにちがいない。むろん稻田自身とて、太古の昔にのみ思いを氣楽に寄せるのではなく、「つねづね羨望にたえない」(三七五頁)最新の考古学的知識を参照することで、そこへ遡りうる時期の区切り目を入れる慎重な姿勢も取っていることも、われわれ読者は知つておかなくてはならないだろう。

四

ところで深読みに過ぎると笑われそうであるが、本書から日本人・日本文化に対する危機感を抱く著者の嘆きが聞こえてならないのは、単に評者一人の錯覚であろうか。「昔話の源流」を探索する旅に出立しようとする著者の動機は、まちがいなくA・Tや『民間文芸のモチーフ索引』のアジア版完成を願つて

書評

松村賢一著

『ケルトの古歌『ブランの航海』序説』

飯 豊 道 男

索引

本書が取り上げているのはアイルランドの古い叙事詩と物語である。近年ケルトに対す

のものである。しかしそれだけではなく前著『昔話は生きている』の題名からも分かるように、「民族の伝承に裏打ちされた、最大多数の語り手たちの、人生観照の結果である」昔話が消えゆくとともに、日本文化の実相を知る材料が消滅する危機感の中で、昔話を通して語り伝えられた日本文化史・人類文化史の構図を描くことについたと考えてよいだろ

う。

最後に評者の関心を反映した書評となつたことを、著者・読者の皆さんにお詫びしつつ、今後、著者の後塵を拝して、評者も微力ながらも『民間文芸のモチーフ索引』アジア版作成作業に精進することを明言しておきたい。

二 『マールドゥーンの航海』と海上巡礼

第一章 冒險と航海の物語

二 『コンラの冒險』と異界行

三 『マールドゥーンの航海』と海上巡

四 『フェヴァルの息子ブランの航海と冒險』

一 写本について

二 韻律

三 原典

四 日本語訳

第三章 異界への旅

補遺 異界と海界の彼方

一 アシーンと浦島伝説をめぐって—

初期アイルランド文学研究のための基本文

る関心が高まっているが、これほど大きなうねりとなつて表面化したことはかつてなかつ

た。これはヨーロッパ自身が始原に遡つて自己検討するようになった動きの反映だろうが、こういう時期に英語文献の翻訳とか研究の紹介、敷衍でなく、難しいケルト語に直接取り組んで原典を日本語に訳す仕事が出てきたのは意義がある。

本書の構成は次のようになっている。

第一章 冒險と航海の物語

二 『マールドゥーンの航海』と海上巡礼

三 『フェヴァルの息子ブランの航海と冒險』

四 写本について

一 韵律

二 原典

三 日本語訳

四 異界への旅

補遺 異界と海界の彼方

一 アシーンと浦島伝説をめぐって—

初期アイルランド文学研究のための基本文